

二〇二〇年五月一五日

大櫓見よや絮降る花が降る
大甕の底まで透けて山女飼ふ
鞘堂の四囲に嵩なす夏落葉
五月雨の床板洗ふ沈下橋
金魚の子いつになつたら赤くなる
五月闇古刹の由緒書縷々と

たか子
素 秀
うつぎ
素 秀
明日香
宏 虎

二〇二〇年五月一四日

播磨灘一望の丘春の鳶
八橋にしやがみ咫尺に花菖蒲
下闇に礎石あるのみ主郭跡
日の匂ひ残る麦藁束ねけり
サイクリング茅花流しと併走す
幸村の抜け穴ここに木下闇

たか子
せいじ
隆 松
智恵子
はく子
ぽんこ

二〇二〇年五月一三日

国中を真赤に染めて大夕焼
青葉へと図書館の窓開け放つ
農小屋にテレビアンテナ揚雲雀
糠床を天地返しす夕薄暑

明日香
こすもす
なつき
ひのと

二〇二〇年五月一二日

天国の夫や如何にと朴の花
水神の水音高鳴り夏来る

うつぎ
菜 々

二〇二〇年五月二一日

初夏の風舞妓のうなじ撫づるかに
長竿を振り出す土手や行々子

菜 々
豊 実

二〇二〇年五月一〇日

母の日の父にも届くプレゼント
玉串の葉擦れ涼しき地鎮祭
島裏に釣舟集む青嵐

菜 々
ひのと
素 秀

二〇二〇年五月九日

紅襷かけてもてなす新茶かな
街路樹の新緑町を明るうす
宿涼し噴煙の島借景に
夏つばめ火の見櫓の残る谷戸

こすもす
満 天
たか子
うつぎ

毎日句会みのる選・二〇二〇年五月一七日